

適期収穫で高品質な大豆生産を！！

1. 生育状況

9月末現在、管内では、まだ黄葉中のほ場もあれば、落葉が進み成熟期に入っているほ場もあります。ほ場によって生育段階が異なりますので、よく観察し収穫作業に向かってください。稲刈り作業の終盤と重なる時期ですが、枯れ上がり程度や莖・子実の水分状況を確認して、大豆の刈り取りが遅れることがないように、計画的に作業を行いましょ！

2. 収穫・乾燥・選別の留意点

(1) 収穫

■ 収穫適期の判断

コンバイン収穫の適期は、成熟期（1株の80～90%の莢が品種固有の熟色となり、莢内の子実が乾燥子実の形状を呈し、莢を振ってカラカラと乾いた音がする時期）を過ぎ、**莖水分50%程度（莖がポキッと折れる頃）、大豆子実の水分が15～18%の頃**で、おおよその目安は**成熟後10～15日頃から**となります。逆に、成熟後25日が経過すると、品質の低下がみられます。

収穫は、汚損粒の発生を防ぐため、莖水分を考慮し、朝露が乾く10時過ぎから16時頃の間を目安に行いましょう。

表 子実水分の目安

子実水分	状態
18%	爪を立てると少しあとが残る
15%	かむとパリッと割れる

■ 雑草の抜き取り

雑草や青立ち株は、**汚損粒の原因**になります。汚損粒はしわ粒と共に、等級低下の最大の要因です。**収穫前に確実に抜き取り**ましょう。

■ 土のかき込み防止

コンバインへの**土のかき込み**は**汚損粒発生の原因**となるため、**土をかき込まない刈高に調整**します。また、排水性の悪いほ場や滞水しやすい箇所は、コンバインの沈下に伴う土のかき込みが予想されるため、事前にほ場の滞水程度を確認しましょう。

【刈り遅れに注意しましょう！】

収穫が遅くなると、莢の劣化に伴って子実水分の変動が大きくなり、光沢が失われたり、しわ粒が増加する等の**品質低下**、裂莢（れっきょう）による子実の脱粒等の**収量低下**を招きます。

もし、大幅な作業の遅れが確実となる場合は、関係機関と相談の上、地域内の装備・施設と連携し、可能な限り適期収穫できるよう調整しましょう。

表 コンバイン収穫適期までの成熟期後日数の目安

品種	早限	適期	晩限
リュウホウ	10～15日	15～20日	25日

(2) 乾燥

高水分実の急激な乾燥は、被害粒（しわ粒、裂皮粒等）発生の原因になります。急激な乾燥を避け湿度を保ちながらゆっくりと乾燥しましょう。乾燥温度の目安は右表のとおりです。

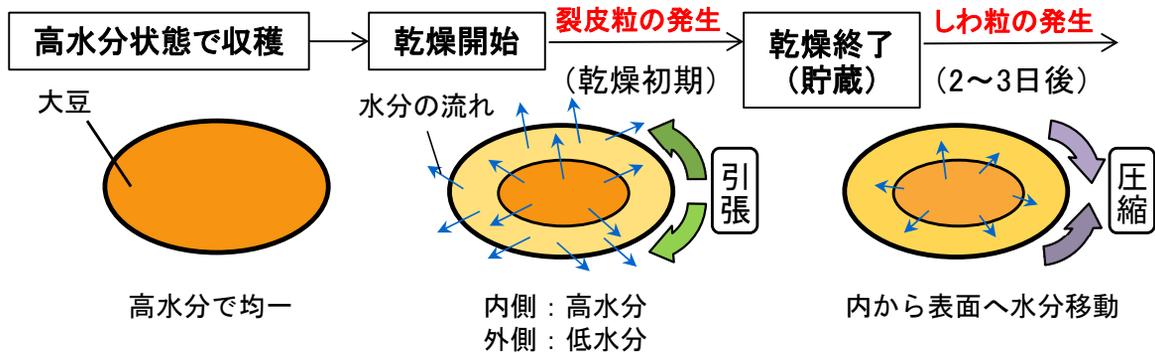
表 大豆乾燥温度の目安

子実水分	乾燥温度
18%	室温+15℃ 以下
22%	室温+8℃ 以下
26%	無加温(常温通風)

※ 送風温度は30℃以下とする

■ 大豆乾燥による被害粒発生のしくみ

- ①裂皮粒：乾燥初期に表面水分のみが急激に低下した場合に発生。
(送風温度が30℃より高い場合に発生が多い)
- ②しわ粒：裂皮発生後、変形した乾燥表皮に子実中心部からの水分が移行して発生。



(3) 選別・調製

仕上げ乾燥後、選別機きょうざつぶつで夾雑物や被害粒等を除去し、整粒歩合の高い高品質な大豆に仕上げます。粒径選別に用いるふるい目は、大粒は7.9mm、中粒は7.3mm、小粒は5.5mm、極小粒は4.9mmを使用します。

表 大豆の品位

等級	最低限度		最高限度				
	粒度(%)	形質	水分(%)	被害粒(%)			
				計	著しい被害粒	異種穀粒	異物
普通大豆							
1等	70	1等標準品	15	15	1	0	0
2等	70	2等標準品	15	20	2	1	0
3等	70	3等標準品	15	30	4	2	0
特定加工用大豆 合格	70	標準品	15	35	5	2	0

農産物検査手帳より

- ・百分率：全量に対する重量比
- ・整粒：被害粒、未熟粒、異種穀粒及び異物を除いた粒
- ・粒度：丸目ふるいをもって分け、ふるいの上に残る粒の全量に対する重量比

【秋の農作業安全運動実施中（9月10日～10月20日）】

- 1 コンバインによる収穫作業は計画的に行い、長時間や夜間の作業は避けましょう。
- 2 トラクターに安全キャブ・安全フレームを装備し、シートベルト着用を徹底しましょう。
- 3 道路走行時は反射材を活用し、安全を確保しましょう。
- 4 作業前後は機械や安全装備の点検を励行しましょう。
- 5 点検・調整時は必ずエンジンを停止しましょう。
- 6 軽トラック運転時のシートベルト着用、一時停止の遵守を徹底しましょう。

適期の病害虫防除・湿害対策で高品質大豆生産を！

1. 生育状況

7月30日の定点調査ほ場の生育は、主莖長は32.9cm（平年：38.8cm）、葉数は8.6葉（平年：9.2葉）、分枝数は0.9本（平年：0.9本）でした（調査基準日7月30日）。

7月の2度の大雨により浸水・冠水してしまったほ場では、生理障害や病害の発生のリスクが高まります。また、管内では7月29日頃に開花期を迎えています（平年7月30日）。各ほ場の状況をよく観察し、今後の管理につなげましょう。

2. 湿害・冠水害による影響と対策

【湿害・冠水害による影響】

- 生育期間の土壌過湿は、根粒活性の阻害による生育不良を引き起こすほか、中耕・培土作業の妨げや雑草害、倒伏被害に影響を及ぼします。主莖先端の生長点への泥水の流入により、生長点の壊死が始まり、今後の生育量不足や立枯症状につながり、減収を引き起こす場合もあります。
- 開花期間中の冠水は、冠水後の停滞水発生や泥水の受精器官への流入による落花につながり、著しい減収を引き起こします。

【湿害・冠水害を受けた場合の対策】

- **明きょ**が泥等で埋まった場合は、**速やかに泥等を除去して補修**しましょう。
- ほ場が乾燥したら、**土中への酸素供給と雑草抑制**を兼ねて、**早急に中耕・培土**を行いましょう。（既に開花している場合は、**浅めの中耕**にします。）
- **葉が黄化**しているほ場では、**追肥**を行い、着莢数を確保します。追肥量は窒素成分で5～10kg/10a程度が目安です。（少なくとも4kg/10a程度の追肥が必要とされています。）
- **茎疫病**の発生が懸念されるため、こまめにほ場を確認し、**発病株を除去**します。
- **大豆の生育が停滞し、ほ場内の雑草繁茂**が懸念される場合は、優先草種を見極め、**適切な除草剤で防除**します。（大豆バサグラン液剤の使用は開花前まで！）

3. 開花期以降に乾燥が続く場合は・・・

大豆は、**開花期～子実肥大期にかけて最も水を必要**とします。開花期以降に土壌が乾燥しすぎると、落花・落莢、百粒重の低下により、収量や品質に影響が出ます。大豆の葉がそり返って白く見えるようになった場合は、必要に応じて畝間かん水や明きょかん水等により、干ばつ防止と生育の維持に努めてください。今後、まとまった雨が期待できない場合は、**暗きょ栓を閉めるなどして土壌水分の保持**に努めてください。

【畝間かん水を行う際の留意点】

- 高温時のかん水は根痛みを起こしやすいため避け、**かん水は朝夕の涼しい時間帯に短時間**で行う。
- ほ場条件は、暗きょや明きょがあり、排水が容易なほ場であること。なお、**排水不良になりやすいほ場では、湿害を生じる可能性があるので行わない**こと。
- ほ場の奥まで短時間にかん水できる水量を確保できるほ場であること。
- **水稻作を含む、近隣ほ場の所有者とよく話し合いのうえ実施**すること。

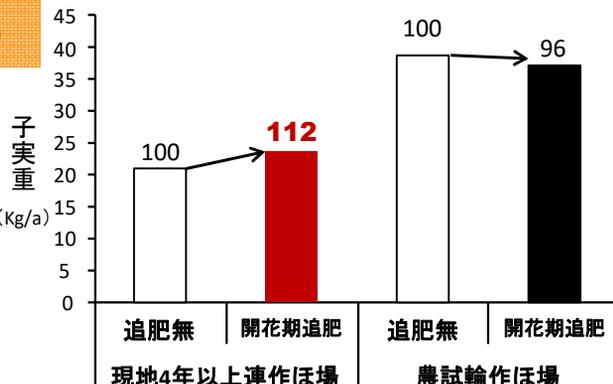
4. 開花期追肥(開花期～開花後10日頃)

大豆は、開花期以降に大量の窒素を吸収します。
開花期に追肥をすることで稔実莢数と粒重の増加による増収を図ります。

特に、長期にわたり大豆を連作し収量性が低いほ場や、湿害により生育不良となったほ場では有効です(水田転換初年目及び地力の高いほ場では不要)。

追肥は、硫安または尿素を用い、窒素成分で10a当たり5～10kg施用します。

なお、葉面に付着すると葉焼けをおこすので注意してください。



開花期追肥が子実重に及ぼす影響(H14秋田農試)
1)開花期追肥は基肥に加え開花期にN1.0kg/a
2)慣行の子実重を100とした場合の指数

5. 病害虫防除

■ ウコンノメイガ

成虫が大豆ほ場に飛来し、幼虫が葉をロール状に綴り合わせて食害します。7月6半旬にほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査し、茎当たりの葉巻数が1.3個以上確認された場合は、ただちに、以下の薬剤で防除を行ってください。
(※サイアノックス剤は大豆に使えなくなりました!)



薬剤名	希釈倍数・散布液量(10a)	散布時期
カスケード乳剤	4,000倍	7月下旬～8月上旬
スミチオン乳剤	1,000倍	
トレボン乳剤	1,000倍	
プレバソンフロアブル5	4,000倍	

■ マメシクイガ ! 多い予報!

本県では最も被害が多い子実害虫です。連作により密度は高まり、水田転換畑では2～3年目以降に被害が増大します。成虫の発生盛期は8月6半旬～9月1半旬で、この時期が薬剤散布の効果が高い防除適期です。また、連作ほ場で有機リン剤で防除する場合は、9月上旬に2回散布が必要です。

防除適期に降雨が予想される場合は、直前に残効性のある薬剤(アディオオン、パーマチオン等)を散布し、降雨後の9月上旬に2回目の防除を実施する体系としましょう。



薬剤名	使用量又は希釈倍数・散布液量(10a)	散布時期	備考
アグロスリン乳剤	2,000倍	8月下旬～9月上旬(1回)	注1) 薬剤は莢によく付着するように散布する。
アディオオン乳剤	3,000倍		
パーマチオン水和剤	2,000～3,000倍	9月上旬(1～2回)	注2) アグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤はカメムシ類にも有効である。
スミチオン乳剤	1,000倍		
トレボン乳剤・EW	1,000倍		
エルサン乳剤	1,000倍		
グレーシア乳剤	2,000～3,000倍		
プレバソンフロアブル5	4,000倍		
トレボン粉剤DL	4kg		

■ ツメクサガ ! 多い予報!

幼虫が葉や莢を食害します。既に葉の食害が目立つ場合はみられますので、ほ場をよく観察し、多発している場合は早期に防除してください。

薬剤名	希釈倍数・散布液量(10a)		散布時期
エルサン乳剤	1,000倍	100~300L	8月上旬~中旬
トレボン乳剤			
フェニックスフロアブル	4,000倍		



■ 吸汁性カメムシ類 ! やや多い予報!

子実を吸汁加害するカメムシ類は、ホソヘリカメムシ、ブチヒゲカメムシ、アオクサカメムシです。子実が加害を受けると、落莢や不稔粒、板莢や湾曲、変色などが発生します。加害期間は若莢が着き始める頃から莢が黄熟する頃までと長く、初夏~盛夏が高温や多照の年に発生が多くなります。

薬剤散布の際は、薬液が莢によく付着するように散布しましょう。アグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤の8月下旬散布はマメシンクイガにも有効ですが、カメムシ類の発生が早い場合は、防除がおくれることもありますので、ほ場をよく確認し散布時期を決定してください。

※プレバソフロアブル5は吸汁性カメムシ類に登録がありません。薬剤選定に注意!!

薬剤名	希釈倍数・散布液量(10a)	散布時期
トレボン粉剤DL	4kg	8月中下旬 (1~2回)
エルサン乳剤	1,000倍	
スミチオン乳剤		
トレボンEW		
トレボン乳剤		
アグロスリン乳剤	2,000倍	
パーマチオン水和剤	2,000~3,000倍	

ホソヘリカメムシ



■ 紫斑病 ! 多い予報!

紫斑病は種子に紫色の斑紋を作り品質を損ないます。莢への感染時期は開花10~35日後頃で、この時期に降雨が続くと莢への菌糸進展が助長されます。茎葉散布剤による防除は開花期20~30日後の防除が基本ですが、着莢期に降雨が多い場合は、1回目防除の約10日後に2回目の防除を行います。(※耐性菌出現の観点から、アミスターは使えません。)



薬剤名	使用量又は希釈倍数・散布液量(10a)	散布時期
トライフロアブル	1,000倍	1~2回 (1回防除が基本。着莢期に降雨が多い場合は2回防除。) 1回目:開花期20~30日後 2回目:1回目の約10日後
ベルコート水和剤・フロアブル		
ニマイバー水和剤	1,000~2,000倍	
プランダム乳剤25	3,000~5,000倍	
Zボルドー	500倍	
Zボルドー粉剤DL	3kg/10a	—

注1) 耐性菌出現回避のため、ニマイバー水和剤、プランダム乳剤25は、各1回の使用とする。

注2) 薬剤は莢によく付着するように散布する。

『大雨への備え』していますか??

今年度は梅雨入りが遅く、6月18日現在で東北地方北部での梅雨入りは発表されていませんが、6月13日発表の1か月予報では、「平年と同様に曇りや雨の日が多い」と予報されています。今後は例年同様、雨の降る日が多くなる見込みであるほか、**突発的な大雨があるかもしれません。**

大雨被害を受けてしまった場合の対策をあらかじめ確認し、湿害による影響を最小限に止めましょう!!

1. 湿害・冠水害による影響

- 播種後の低酸素条件は、**出芽率を低下させるのみでなく、その後の生育不良を引き起こし、収量を低下させます。**
- 生育途中の土壤過湿は、生育不良を引き起こすほか、中耕・培土の作業を妨げ、雑草害や倒伏被害につながります。特に、**本葉第4葉期頃（播種後30～40日後頃）が最も冠水・停滞水の影響を受けやすく、24時間を超える冠水では40%以上の減収につながるというデータもあります。**
- ※ 一定の条件下での試験データです。実際には、より短時間の冠水・浸水でも大きな被害が出る可能性があります。大雨等により倒伏が発生した場合などは、さらに被害が大きくなることもあります。

2. 冠水・浸水被害を受けた場合の対策

- **明きよが泥等で埋まった場合は、速やかに泥等を除去して補修しましょう。**
- ほ場が乾燥したら、**土中への酸素供給と雑草抑制**を兼ねて、**早急に中耕・培土**を行いましょう。（既に開花している場合は、浅めの中耕にします。）
- **葉が黄化**しているほ場では、**追肥**を行い、着莢数を確保します。（追肥量は窒素成分で5～10kg/10a 硫安N21%の場合24～48kg程度）
- **茎疫病**の発生が懸念されるため、こまめにほ場を確認し、**発病株を除去**します。
- **大豆の生育が停滞し、ほ場内の雑草繁茂**が懸念される場合は、優先草種を見極め、**適切な除草剤で防除**します。（大豆バサグランの使用は開花前まで!）

大豆茎疫病の株

浸水
(土壤表面が水で覆われる)冠水
(作物体が完全に水没)

仙北大豆情報

No. 1

令和6年5月2日

発行

仙北地域振興局農林部農業振興普及課

Tel 0187-63-6110

基本技術の徹底で品質・収量の向上を！！

～ 生育初期の管理を徹底し、収量を安定させましょう！ ～

1. ほ場の選定

- 排水の良いほ場を選びましょう。
- 大豆の好適地下水位は30～40cmとされています。地下水位40cm程度では根張りが良く根粒菌の付着が良好ですが、地下水位20cm程度では湿害を受けやすく、収量が低下します。
- 水稲と大豆を交互に作付する場合は、営農水系単位ごとに生産団地化を計画的に行う「ブロックローテーション」の導入が理想的です。団地化は、作業効率と排水対策等の効果を高めます。
- 連作ほ場（特に3年以上）への作付は、できるだけ避けましょう。
- 高地力で高い収量が期待できるため、肥沃度の高いほ場を選びましょう。

2. 排水対策

- 地表面排水対策として、畦畔際に幅20～30cm、深さ15～25cm程度の明渠を設置しましょう。なお、**明渠は必ずほ場外の排水路につなげる**ことが重要です。
- 地表面排水等の対策を行っても地下水位が高かったり、土壌の透水性が悪くほ場が過湿である場合は、**本暗渠及び補助暗渠による地下排水対策**を行いましょ。
- 明きよと地下排水対策の組み合わせで、転作田での排水効果が向上します。これにより、生育が安定するほか、適期作業が可能となり、収量増加が期待できます。

3. 土づくり

- ほ場の**目標pHは6.0～6.5**です。pHが低い場合は、右表を目安に土づくり資材を投入しましょう。
- 水田転換畑における大豆栽培では、窒素施肥について留意します。転換初年目～2年目畑では、多くても1kg/10aとし、3年目以降は、普通畑と同様、標準施肥量とします(右下表)。
- 大豆の作付年数が多いほ場では、積極的に堆肥などの有機物を施用しましょう。

表 土壌改良資材の目安

品名	使用量(10a)
タンカル	100kg
苦土石灰	100kg
粒状てんろタンカル	100kg
ようりん	60kg

表 10a当たりの標準施肥量(kg/10a)

転換年数	窒素	リン酸	カリ
水田転換1～2年目	0～1	10～12	6～8
水田転換3年目以降	1～3	10～12	6～8

4. 播種時期に合わせた適正な播種量

- 播種時期が遅くなると、生育量が小さくなります。**播種時期に応じて畦間、株間を狭めるなどして播種量を増やし、生育量を確保**しましょう。(右表)
- 播種の深さは通常3cm程度ですが、**土壌が乾燥し降雨が期待できない場合はやや深め、播種後すぐに降雨が予想される場合はやや浅め**とします。
- 鎮圧が不十分だと乾燥しやすく、発芽が遅れることがあります。

表 リュウホウの播種期別最適播種量と畦間・株間の目安

播種時期	播種量(kg/10a)	畦間(cm)	株間(cm)
5月下旬 ～6月上旬	4.0～5.0	75	16～20
		70	17～21
6月中旬	5.3～6.6	75	12～15
		70	13～16
		65	14～17
6月下旬 ～7月上旬	7.5～10	75	10
		70	10～12
		65	10～12

5. 病害虫対策

- 種子伝染性病害の発生を予防するため、**種子更新は必ず行いましょう。**
- 紫斑病の種子消毒には、クルーザーMAXX（原液を乾燥種子1kgに対して8ml塗沫処理）を使用します。塗沫後は広げて30分しっかり乾かしてください。
クルーザーMAXXは鳥害（ハト、キジバト）に対する忌避効果があるほか、初期病害虫（茎疫病、黒根腐病、タネバエ、ネキリムシ類、フタスジヒメハムシ、アブラムシ類）の同時防除が可能です。

【ネキリムシ類（タマナヤガ）】

今年の成虫飛来数は平年並の予報です。成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するため、播種前にほ場内やほ場周辺の除草を確実に行ってください。

6. 除草対策

- 大豆の標準的除草体系は、**雑草発生前の土壌処理剤による除草剤散布と中耕・培土**です（下表）。ほ場前歴や優占雑草など草種にあった除草剤を選択しましょう。
- ほ場が乾燥している場合は、粒剤よりも水和剤を選択し、使用基準範囲内で水量を多めにして散布します。
- 土壌処理剤を使用しても残草してしまった場合は、茎葉処理剤による雑草防除を選択しましょう。

表 大豆の標準除草体系

薬剤名	優先して発生する雑草		使用量(10a)		使用時期
	イネ科雑草	広葉雑草	薬量	水量(%)	
エコトップP乳剤	●	●	500~600ml	100	雑草発生前 大豆播種後出芽前
クリアターン細粒剤F	●	●	4~5kg	-	大豆播種直後
サターンバアロ粒剤	●	●	5~6kg	-	雑草発生前 大豆播種後出芽前
サターンバアロ乳剤	●	●	600~800ml	70~100	
ラクサー乳剤	●	●	500~600ml	100	
ラッソー乳剤	●		400ml	100	
トレファノサイド粒剤2.5	●		4~5kg	-	
トレファノサイド乳剤	●		200~300ml	100	
ロックス粒剤		●	5~6kg	-	
ロックス		●	150g	70~150	



1回目 中耕・培土 初生葉展開期~本葉1葉期頃



2回目 培土 大豆2~4葉期頃(播種後25~35日)



3回目 培土 大豆6~7葉期頃(播種後45~50日)

一般雑草発生畑
雑草茎葉散布または全面土壌散布
(大豆出芽前期~本葉1葉期
(雑草発生始期~2葉期))
パワーガイザー液剤
300ml 100L/10a

※1回目の中耕・培土より除草を優先する必要がある場合の体系。

7. 難防除雑草の発生に注意！！

- つる性の帰化雑草（帰化アサガオ類やアレチウリ）は、大豆畑に進入すると防除が難しく、甚大な被害をもたらします。
- 侵入初期の防除が重要ですので、ほ場やほ場周辺をよく観察し、花が咲く前に確実に除草しましょう。
- 難防除雑草が発生してしまった場合は、田畑輪換による水田化や、複数年の体系除草により、種子の密度を減少させることが重要になります。



図. 帰化アサガオ



図. マルバルコウ

○難防除雑草が発生してしまったほ場では、草種に応じて、下図の体系防除を行います。

難防除帰化雑草(アレチウリ)

防除対象	土壌散布 は種後出芽前 (雑草発生前)	大豆出芽揃期 ～ 1葉期	中耕・培土	大豆4葉期	大豆6葉期 ～ 収穫28日前
アレチウリ	フルミオWDG 10g/10a 100L/10a	パワーガイザー液剤 300mL/10a 100L/10a		アタックショット乳剤 30mL/10a 100L/10a	

難防除雑草(アメリカアサガオ、マルバルコウ)

防除対象	土壌散布 は種後出芽前 (雑草発生前)	大豆2葉期	中耕・培土	大豆4葉期	大豆6葉期 ～ 収穫28日前
アメリカアサガオ マルバルコウ	フルミオWDG 10g/10a 100L/10a コダールS水和剤 300g/10a 100L/10a	大豆バサグラン液剤 100～150mL/10a 100L/10a		アタックショット乳剤 30mL/10a 100L/10a	

(パワーガイザー液剤使用時の注意)

- ・処理翌日には、葉の黄化や縮葉等の薬害が発生する可能性があるが、処理後7日程度で止まり、処理後に抽出する葉には影響がない。
- ・湿害等により大豆が軟弱な生育となっている場合、処理後3日間の平均気温が16℃を下回る場合、処理後の降雨が予想される場合等は、強い薬害が発生する恐れがあるため使用を避ける。
- ・有機リン系殺虫剤または、イネ科雑草処理除草剤との10日以内の近接散布は薬害の恐れがある。

(アタックショット乳剤使用時の注意)

- ・処理翌日には、葉の褐変や縮葉等の薬害が発生する可能性があるが、処理後3日程度で止まり、処理後に抽出する葉には影響がない。
- ・湿害等により大豆が軟弱な生育となっている場合、処理後3日間の平均気温が17℃を下回る場合、処理後の降雨が予想される場合等は、強い薬害が発生する恐れがあるため使用を避ける。

(共通の注意点)

- ・薬害を助長する恐れがあるため、展着剤は使用しない。
- ・雑草の茎葉が濡れるように、均一に散布する。

ほ場やほ場周辺で見つけたら、関係機関にご連絡ください！！

8. 干害対策

○暗きょ開閉の実施

降雨が続き湿害の発生が懸念される場合は、暗きょ栓を開き排水を確保しましょう。乾燥が続き干害の発生が懸念される場合は、暗きょ栓を閉じ土壤水分の確保に努めましょう。

今後の天候を確認し、こまめな暗きょ栓の開閉を行うことにより、大豆栽培に適した土壤水分を維持しましょう。

○畦間かん水の実施

開花期から粒肥大期にかけて乾燥が続く場合は、畦間かん水の実施が効果的です。ただし、排水性が悪いほ場や高温条件下では、逆に湿害の発生を助長します。まずは、ほ場の排水性を確保したうえで、朝や夕方の涼しい時間にかん水を行いましょう。

ほ場の水尻側まで水分を行き渡らせるため、かん水はほ場1枚ずつ実施し、入水時の水勢を高めることが有効です。

※用水の利用は、近隣のほ場所有者などと充分相談のうえで行ってください※

9. R6年産用種子は余剰在庫がありません！

○R6年産用種子の状況

R5年産大豆は、大雨や高温乾燥の影響により、採種ほ産種子大豆、一般大豆ともに収量・品質が著しく低下し、種子としての基準を満たす大豆が確保されていません。そのため、R6年産用種子は、R4年産一般大豆を転用して種子としていますが、種子としての基準は満たしており、発芽に問題はありません。

○種子水分と播種時の注意点

転用によるR6年産用種子は、適切な環境で保存されていましたが、年数の経過により若干の水分低下がみられます。以下の点に注意し播種作業を行いましょう。

- ほ場の排水性を十分に確保し、停滞水等により播種適期を逃さないようにしまししょう。
- 種子消毒を行い、発芽後の病害虫による被害を防ぎましよう。
- 急激な吸水により、発芽不良が発生します。播種後2～3日は降雨を避けるよう、天気予報をよく確認して作業日程を組みましよう。
- 本年から新たに吸水処理に取り組むことは避けましよう。

※R6年産用種子は余剰在庫がありません！

播種後は、発芽不良などによる播き直しが難しいため、基本技術の徹底により、確実な苗立ちを目指しましよう。